

Barbara Ruch, ed., *Engendering Faith:*

*Women and Buddhism in Premodern Japan*, Ann Arbor:

University of Michigan Center for Japanese Studies, 2002.

彌 永 信 美

はじめに、ひと言お断りしておかなければならない。評者は、本書の主要な内容である前近代の日本における女性と仏教の問題にかんして、専門的な知識をもっていないし、フェミニズムやジェンダー論についてもこれまで特別な関心をもったことはない。それゆえ、本書の多くの論文を研究史の中に位置づけて正確に評価する能力に欠けていることを記しておかなければならない。それでも、この書評をお引き受けた理由の一つは、これだけ重要な書物が、日本ではこれまでほとんど紹介されることがないらしいということに、義憤に近いような感情を覚えたからである。後述のように、本書はアメリカとカナダおよび日本の研究者による二十三の論文によって成り立っている。そのことからだけでもうかがえるように、これほど緊密な国際学術協

力のもとに編集され、作成された論文集は、日本についての人文科学関係の学問では多くはないだろう。それにもかかわらず、最近(本書刊行後)出た『国文学 解釈と鑑賞』の「女性と仏教」と題された特集号(二〇〇四年六月号)には、本書についてひと言も言及がない。より一般的に、女性史やジェンダー論は、日本学や東洋学の分野でもっとも国際協力が進んでいる分野の一つであるように思われる。たとえば脇田晴子、S・B・ハンレー編『ジェンダーの日本史』上下二巻(東京大学出版会、一九九四年)は、全部で四十一篇の論文のうち、十二の論文が日本以外の研究者による論文である。ところが、この重要な書物(の大部分)が英訳されて存在することは、日本ではほとんど知られていないのではないだろうか(Wakita Haruko, Anne

Bouchy, Ueno Chizuko, ed., *Gender and Japanese History*, vol. 1 and 2, Osaka, Osaka University Press, 1999)。一般に、文化関係では、日本は欧米にたいして圧倒的な輸入超過の国であるといわれているが、日本学や仏教学、東洋学の分野では、逆に圧倒的に輸出超過の国である。しかも日本の研究者は海外の研究をほとんど知らないし、関心をもつことも少ない。これは、日本人にとっても外国の研究者ととっても、きわめて不均衡かつ不健全な状態だといわなければならない。本誌の書評は、これまでも外国のすぐれた研究をとり挙げてきており、今回も本書を書評の対象に選択したことにより、こうした状況が少しでも改善されることを祈っている。

本書の第一印象としてまず特筆すべきことは、その驚くべき外観である。二六×十八・五 cm、厚さ五 cm 以上の巨大なハードカバーで、LXXVii+七百六ページ（内、五八一〜七〇六頁は漢字一覧、文献目録、執筆者略歴、索引）。一見、なにかの百科事典かと思わせるような大冊である。また、そこにちりばめられた多数の図版がすばらしい。カラーと白黒合わせて八十六のきわめて美しい図版が、多くの論文を飾っている（そのほかにも、表、系図なども相当数ある）。日本の、おもに中世から近世の仏教絵画を中心とした図版がこれだけ多数掲載された書物は、欧米では多くはないのではないだろうか。一般に欧米の學術書には図版

がほとんどないことを考えると、本書は異例中の異例であり、それだけでも特筆に値する。ただ、このような特大の書物であるために、非常に重く、携帯にはまったく適していない。アメリカの大学生が、本書を教材に使って毎日持ち歩くようなことを想像すると、気の毒としか言い様がない。なお、外観に関連して付言すると、本書の値段は六十九 USD のことで、これだけの豪華本であることを考慮すると破格の価格と言えるだろう（ただし、なぜか本書は Amazon では購入しにくいようである。直接、出版社の web site を通して注文したほうが確実に入手できる。

URL は

[http://websvcs.ics.umich.edu/cjs/publications/publication\\_detail.php?pubid=7&series=Monographs](http://websvcs.ics.umich.edu/cjs/publications/publication_detail.php?pubid=7&series=Monographs) および  
<http://websvcs.ics.umich.edu/cjs/publications/orderin-g.php>。

六百ページ以上の内容の濃い論文について、一つ一つ詳しく紹介、批評することは不可能なので、以下の小稿では、全体の概要を紹介したうえで、二、三の論文についてひと言ずつ触れるように試みてみたい。

本書の編者、Barbara Ruch 氏は、日本語の著書『もう一つの中世像―比丘尼・御伽草子・来世』（京都、思文閣出版、一九九一年）やいくつもの論文の著者として、日本でも広く知られた中世文学・文化史の研究者であり、長く

ニューヨークのコロンビア大学教授として、またコロムビア大学の中世日本研究所の所長として活躍されたことでも知られている。『もう一つの中世像』を読まれた読者なら、Ruch氏の深い学殖に啓発されるばかりでなく、その美しく格調高い日本語に驚嘆されたことだろう。外国人学者の日本語が「流暢」であることに驚くのは、外国人に日本語ができるはずがないという無意識の悔りのようなものを前提としていて、必ずしも快いものではないが、Ruch氏の文章は、多くの日本学者の文章をはるかに越える見事なもので、文章家としての、またストーリーテラーとしての天賦の才能を遺憾なく見せつけるものである。この歴大で画期的な論文集を編むという難事業を達成できたのも、Ruch氏の学問的情熱に裏づけられた強い説得力によるところが大であったらう。各論文は、もちろん各著者の個性に基づいているが、それでも、造本、図版、全体の構成や格調などの点で、本全体を統一する明確なトーンが感じられる。これは、編集にたずさわった人々を束ねた、Ruch氏の粘り強い意志と導きによるものと思われる。本書はまさに、Ruch氏の学問的情熱の結実であると言えるだろう。

まず、目次の日本語訳、および日本語論文の出典を載せておこう（なお、日本語論文の翻訳はすべて「翻訳・翻案」(translated and adapted)である。また、日本語論文の題名は、翻訳された題ではなく、原題を載せる）。

書評（彌永信美）

大隅和雄「序文―女性と仏教・研究の新時代」（書き下ろし）xxiii-xxvii頁

大隅和雄「仏教の日本化と女性」（東京女子大学女性学研究所・プロジェクト研究報告3「中世日本の女性の教養」一九八三年、所収論文）xxviii-xxix頁

Barbara Ruch「障碍と義務―収録論文の概観」xiii-xix頁

B. Ruch「プロローグ・頬に焼いた鉄を当てる―女性聖職者の最後の手段」lxv-lxxviii頁

第一部「中国仏教と初期日本仏教における女性」

竺沙雅章「中国における尼僧教団の成立と発展」（シリーズ「女性と仏教」I、『尼と尼寺』、平凡社、一九八九年、所収）一〜二〇頁

御子柴大介「光明子の仏教信仰」（『尼と尼寺』所収）二一〜四〇頁

本郷真紹「国家仏教と宮廷仏教―宮廷女性の役割」（シリーズ「女性と仏教」III、『信心と供養』、平凡社、一九八九年、所収）四一〜六一頁

第二部「尼と尼寺」

Paul Groner「尼僧受戒の変遷―八世紀から十世紀まで」六五〜一〇八頁

勝浦令子「尼削ぎ考―髪型から見た尼の存在形態」（『尼と尼寺』所収）一〇九〜一二九頁

牛山佳幸「中世の尼寺と尼」（『尼と尼寺』所収）一三一〜

一一一

一六四頁

Martin Colcutt 「尼將軍—北条政子の生涯における政治と宗教」一六五—一八七頁

Marian Ury 「日本最初の仏教史書『元亨釈書』（一二三二年）に見る尼と女性信者」一八九—二〇七頁

Anne Dutton 「徳川時代日本における寺院による離婚—東慶寺と万徳寺の資料の概観」二〇九—二四五頁

Diana E. Wright 「万徳寺—縁切り寺以上のものとして」二四七—二七六頁

第三部 「女人救済に関連する聖典の諸問題」

永田瑞 「仏典における女性観の変遷—三従、五障、八敬法の周辺」（シリーズ「女性と仏教」Ⅱ、『救いと教え』、平凡社、一九八九年、所収）二七九—二九五頁

吉田一彦 「童女の成仏」（『救いと教え』所収）二九七—三二四頁

Paul B. Watt 「慈雲尊者（一七一八—一八〇四年）の仏教における身体、ジェンダー、社会」三二五—三四〇頁

第四部 「神々と図像」

Nicole Fabricand-Person 「護法の女鬼神—日本仏教芸術における普賢十羅刹女の図像」三四三—三八二頁

Hank Glassman 「伝香寺の裸体地蔵—鎌倉時代の仏教における女性救済についての覚書」三八三—四一三頁

第五部 「信心と行」

西口順子 「骨のゆくえ」（西口順子著『女の力—古代の女性と仏教』、平凡社選書、一九八七年、第二章）四一七—四三九頁

小原仁 「女人往生者の誕生—『中右記』の女性を巡って」（『信心と供養』所収）四四一—四六二頁

Susan Matisoff 「浄土から締め出された女性？—高野山と荻萱伝承」四六三—五〇〇頁

遠藤一 「坊守以前のこと—夫と妻、真宗史における女性の属性」（『信心と供養』所収）五〇一—五三五頁

B. Ruch 「女から女へ—中世および近世日本における布教者としての熊野比丘尼」五三七—五八〇頁

漢字一覽／文献目録／執筆者紹介／索引

この目次を見ても明らかとなり、二十三の論文のうち十二までが、もと日本語で書かれた日本人研究者の論文である。また、そのうちの十が、一九八九年刊行の大隅和雄・西口順子編「シリーズ・女性と仏教」Ⅰ—Ⅳ（以下「シリーズ」と略す）のうちのⅠ—Ⅲに収録された論文の翻訳である。その意味では、本書は「シリーズ」の英語版であり、アメリカでの拡張版であるといってもいいだろう。本書は、目次にもあるように、第一部「中国仏教と初期日本仏教における女性」、第二部「尼と尼寺」、第三部「女人救済に関連する聖典の諸問題」、第四部「神々と図像」、第

五部「信心と行」に分かれている。これらは、最初の時代区分的な分類によった「中国仏教と初期日本仏教における女性」を別とすると、「シリーズ」の四分冊、「尼と尼寺」、「救いと教え」、「信心と供養」および「巫と女神」に多少とも対応している。「シリーズ」の第四分冊からはなぜか一つも翻訳されていないが、その代わりに、図像を中心とした二論文をまとめた「神々と図像」の部が加えられたと言えるだろう。

本書にも (xlv-xlvii頁)、また『もう一つの中世像』にも (八〇一三頁) 述べられているように、Ruch氏の「女性と仏教」問題群への関心は、一九七六年に『日本の美術』一二三号として出版された西川啓太郎編「頂相彫刻」に載せられていた禅尼・無外如大(一二二二三〜一二二九八年)の彫像に接したことから始まったという。この「運命的」な出会いが、彼女の研究者としての人生を変えた。ほぼ時を同じくして、日本でも一九八四年から大隅和雄・西口順子両氏を中心として「研究会・日本の女性と仏教」が発足し、その最初の成果が五年後の一九八九年に「シリーズ・女性と仏教」として発表された。一方、同じ一九八九年の十二月に、コロンビア大学で、「前近代日本における女性と仏教」をテーマとしたワークショップが開催され、五十七人の研究者(そのうち「大隅・西口研究グループ」から七人)が参加した。その機会に、シリーズの中から英訳する論文

が選定されたという (xlviii-xlix頁)。さらに、一九九三年に、Ruch氏が国文学研究資料館の外国人研究員として来日された機会に、尼門跡寺院の資料調査のプロジェクトが起ち上げられ、その後も調査が進められている。その成果は、まだ公開には至っていないが、非常に実り豊かな結果が期待できるようである(これについては、本書 xlix-x頁、西口順子稿「女性と仏教・軌跡と動向」、『国文学 解釈と鑑賞』二〇〇四年六月号、一五九頁下段、

<http://www.columbia.edu/cu/ealac/imjs/reports/1995-06/index.html>などを参照)。こうした準備段階を経て、十年余りの後に刊行されたのが、本書である。

なお、本書については、管見に入ったかぎりでは、以下の三つの書評がある。Rajyashree Pandey, "Medieval Experience, Modern Visions: Women in Buddhism," *Monumenta Niponica*, vol. 59, No. 2, Summer 2004, pp. 223-244 (これは、本書のほかにも Bernard Faure, *The Power of Denial: Buddhism, Purity, and Gender*, Princeton University Press, 2003 の書評も兼ねている)。R. Keller Kimbrough, *Japanese Religions*, Vol. 29, Nos. 1 & 2, January 2004, published by the NCC Center for the Study of Japanese Religions, pp. 131-134 (R. Keller Kimbrough, *The Journal of Japanese Studies*, 30-2 (2004), pp. 449-453. <http://www.jstor.org/stable/3102650>)。最後のものは短い紹介だが、Pandey氏とKimbrough氏

の書評は、内容に立ち入った興味深いもので、評者も大いに啓発されたことを記しておきたい。

本書は「シリーズ・女性と仏教」のアメリカにおける拡張版という性格があると述べたが、全体として「シリーズ」とはやや違うところに力点が置かれているように感じられる。それは、ひと言で言えば、フェミニズム的な主張がどの程度前面に出されているか、という違いである。実際には、個々の著者、個々の論文によって差が大きく、アメリカの研究と日本の研究という二つに分けて、有意の差があるとは言えないようである。それでも、全体のトーンとして、本書の方が明らかにフェミニズム的な印象が強いのは、おそらく、編集方針の違いによるものだろう。

一九八四年に開始された「研究会・日本の女性と仏教」以降の「女性と仏教」問題群を対象とした研究が、日本の仏教史研究の一つの画期をなし、多くのすぐれた成果を挙げてきたことには、誰も異論がないだろう。事実、日本の仏教史は、この画期を経てはじめて「男と女の」、人間の生活の中の仏教史として生まれ変わってきたといっても過言ではないと思う。しかし、その仏教の歴史の中の一つの基調をなす女性差別についての批判が、どのような意味をもつかについては、まだ議論が尽くされているとは言えないだろう。フェミニズム的な主張が比較的強く見える本書では、その問題が、より重要な意味をもっているように思わ

れる。そもそも前近代における「差別」とはどういうことか、という本質的な問題を考えねばならない。意識的に、悪意や怖れ、憐れみなどを含んだ軽蔑の態度で、ある人々に接する、ということが「差別」なのか、意識的にはそういう意図はなくとも、結果としてある人々を侮蔑したり、不自由な状況に陥れたりすることが「差別」なのか、また、「差別される」人々は、「差別」されていることを意識している人なのか、その意識がなくとも「差別」されることもあるのか、など。「差別されていると感じる」ということ自体が、「人間はすべて平等」という前提が成立した近代以降のことだったのではないだろうか。人間は平等か否か、という問題設定が存在しなければ、「差別される」という意識もなかったのかもしれない。

現代の研究者の価値観や倫理観と、研究対象の文化の価値観とは、厳密に区別されなければならない。たとえば、上引の Pandey 氏の書評にも取り上げられている Ruch 氏の論文「類に焼いた鉄を当てる」では、十七世紀の禅尼・了然元聡が、黄檗宗の老師・白翁道泰のもとに弟子入りしようとして、彼女が「美しすぎる」ことを理由に拒否されたが、その場で「火熨斗」を頬に当てて肉を焦がし、入門を許された、という事件について論じられている。そこで Ruch 氏は、了然の行為を「驚くべきラディカルな宗教的反抗の態度であり、(ほとんど) 宗教的なフェミニズムであ

る」と評している (LXXI-LXXII頁)。しかし、自らの肉体を焼かなければ入門を許されないような宗教に入門することが、開放への道と言えるだろうか。現代のフェミニズムを基準に考えるなら、そのような宗教は、それ自体、拒否されるべき対象であるだろう。一方、この事件を記録し、話題にした当時の社会の価値観は、それ自体としてあらためて明らかにされなければならないのではないだろうか。

本書に収録された日本人研究者による論文は、すべて古典的価値を持つものとして評価が定まっていると思われるので、ここではとくに取り上げない。ただ、(大隅氏の「序文」以外は)すべて十数年以上前のもので、もう少し最近の研究も紹介されればよかつたただだろうと思われる。上に述べたように、翻訳はすべて「翻案」であり、字句通りの訳ではないが、多くの場合、より読みやすいものとなっていると言える。しかし、原文で原典が引用されている箇所では原典の翻訳が略されることが多い、など、省略が多すぎるように思われることもある。一方、勝浦論文や遠藤論文などは、多くの美しい図版が添えられて、図像的にはもとの論文よりも価値の高いものになっているし、また、永田論文は、原文に一つも注がなかったのにたいして、翻訳では翻訳者による二十二の注が付されていて、便宜が図られている。だが、Kimbrough氏の書評にも指摘されているように、勝浦論文では、たとえば『釈氏要覧』

に注して「大正新修大蔵経五十四巻」とだけあるのが、翻訳でもそのままになっているが(一一七頁)、ページ数などの情報を含まないこのような注は、不親切であるし、欧米での一般の学術論文の慣例に即していない(この場合は、大正蔵五四・二六一上段二二二〜二二五)。このように、原著者と翻訳者のコミュニケーションがより緊密にとられていたら改善されただろうと思われる部分はいくつかある。また、原論文の出典が一目で分かるようになっていないこと、あるいは竺沙論文の固有名詞の漢字が漢字一覧に載せられていないこと、など、いくつか問題があることも事実である。

アメリカの研究者による論文で、特に印象に残ったのは、Groner 論文、Matisoff 論文、また最後の Ruch 氏による「女から女へ」である。Groner 論文は、抄訳が先に挙げた『ジェンダーの日本史』の上巻に収録されている。といつても、原文は四十頁以上の長編(うち十四頁が注)であるのにたいして、抄訳は二十頁程度で、翻訳も(非常な労作ではあるが)必ずしも満足できるものとはいえない。内容は題名のとおり、奈良朝から平安朝中期に至るまでの尼僧の受戒の歴史だが、石田瑞麿氏、牛山佳幸氏、勝浦令子氏などの日本の研究を縦横に駆使し、また自身の『最澄』(Saicho: *The Establishment of the Japanese Tendai School*, Honolulu, University of Hawaii Press, 2000)なども参照しながら、この時代の尼僧史を詳述したもので、重厚かつ

模範的な論文である。Matisoff 論文は、「荳菫」伝承を中心として、高野山の女人結界の問題を説いたもので、高野山の麓の慈尊院や天野、学文路、あるいは四国の弥谷寺、長野の善光寺や西光寺など、荳菫伝承にゆかりの霊場について、多くはその場を自ら訪れた記憶を交えて語っている。高野聖や時宗とのかかわりなどに触れ、弘法大師とその母あこや御前の奇妙な伝承にも関説して、中世の伝承世界の豊かな拡がりや垣間見せる。Matisoff 氏によれば、荳菫道心の物語は、父と子の情愛の悲劇であるだけでなく、夫と妻、母と子の物語でもあり、西方浄土に往生した母と娘の物語でもある、という。「結論」の最後の文章は、この論文全体の趣旨を示すとともに、その文学性の高さを示すものでもある。「慈尊院で豊かな乳を祈る授乳中の母も、学文路で安産を祈願する信心深い妊婦も、参詣の道で仕事に精を出す熊野比丘尼も、あるいはまた救済を希求する一般の女性たちも、弘法大師の母や石童丸の母の苦悩と変貌の物語に自己を投影して共感した。女たちもまた、この伝説の力に惹きよせられていたのだった」(四九五頁)。論文集の最後に飾る Ruch 氏の熊野比丘尼についての論文は、まずケンペルの「江戸参府旅行日記」に見える「熊野比丘尼」について述べ、その後、江戸時代の画像史料を大々的に用いて、絵解き比丘尼と歌比丘尼の活動を生き生きと描き出している。二十五葉の鮮明な図版(そのうちの十二がカラー図版)を援用したこの部分は、図像の説得力と見事な

語り口で、圧倒的な魅力がある。これほど贅沢に図版を用いた論文は評者はほとんど見たことがない。これは、林雅彦氏の最近の論文「熊野比丘尼と絵解き―文献史料に見る」(『国文学 解釈と鑑賞』二〇〇三年十月号、一四七―一五七ページ)、「続・熊野比丘尼と絵解き―絵画史料に見る」(同上誌、二〇〇四年二月号、七七―八八ページ)とも併せて、中世末期から近世にかけての女性史、あるいは女性と仏教にかんする重要な貢献の一つと言えるだろう(林氏は、この Ruch 論文には言及されていない)。

このほかにも、たとえば万徳寺と江戸の大奥の関連について述べる Wright 論文、慈雲尊者の女性観を論ずる Walt 論文、さらに普賢十羅刹女の図像の起源について新しい仮説を提出する Fabricand-Person 論文、地藏菩薩と女性性にかんして興味深い視点を提供する Glassman 論文など、新鮮な示唆に富む論文が多数収録されている。欧米でも日本と同じような問題が論じられ、すぐれた成果が挙げられていることを、少しでも多くの日本の研究者に知っていたきたい。

#### 【キーワード】

女性と仏教 仏教と差別 欧米の仏教研究

追記 小稿を書くに当たって、Caroline Hirasawa 氏に多く御教示いただいたことを記して感謝したい。